

## 『心を映し出す奇跡』 マルコ2:1~12

- 2:1 幾日かたって、イエスがまたカペナウムにお帰りになったとき、家におられるという  
うわさが立ったので、
- 2:2 多くの人々が集まってきて、もはや戸口のあたりまでも、すきまが無いほどになった。  
そして、イエスは御言を彼らに語っておられた。
- 2:3 すると、人々がひとりの中風の者を四人の人に運ばせて、イエスのところに連れてき  
た。
- 2:4 ところが、群衆のために近寄ることができないので、イエスのおられるあたりの屋根  
をはぎ、穴をあけて、中風の者を寝かせたまま、床をつりおろした。
- 2:5 イエスは彼らの信仰を見て、中風の者に、「子よ、あなたの罪はゆるされた」と言わ  
れた。
- 2:6 ところが、そこに幾人かの律法学者がすわっていて、心の中で論じた、
- 2:7 「この人は、なぜあんなことを言うのか。それは神をけがすことだ。神ひとりのほかに、  
だれが罪をゆるすことができるか」。
- 2:8 イエスは、彼らが内心このように論じているのを、自分の心ですぐ見ぬいて、「なぜ、  
あなたがたは心の中でそんなことを論じているのか。
- 2:9 中風の者に、あなたの罪はゆるされた、と言うのと、起きよ、床を取りあげて歩け、  
と言うのと、どちらがたやすいか。
- 2:10 しかし、人の子は地上で罪をゆるす権威をもっていることが、あなたがたにわかる  
ために」と彼らに言い、中風の者にむかって、
- 2:11 「あなたに命じる。起きよ、床を取りあげて家に帰れ」と言われた。
- 2:12 すると彼は起きあがり、すぐに床を取りあげて、みんなの前を出て行ったので、一  
同は大いに驚き、神をあがめて、「こんな事は、まだ一度も見たことがない」と言った。

## ●著論

## 詩篇50:15

「悩みの日にわたしを呼べ、わたしはあなたを助け、あなたはわたしをあがめるであろ  
う」。

今日お読みしたところにも、中風という深刻な病の悩みを抱えていた人がありました。  
この中風の人は、自らの力では自分の体をどうすることもできない。イエスさまのもと  
に行くことさえも望みえなかったのです。しかし、彼には彼のことを心配し、その悩み  
を共有する友人たちがいました。そして、その悩みの日に、イエスさまを求めて、彼ら  
は彼を抱えて行動を起こしたのです。それが今日の物語です。

わたしはここに教会の原型を見ます。悩みを持つ人がいる。そしてそのことを自分の問  
題としてともに祈り、共に主を求める兄弟姉妹がいる。それが教会です。 だれも、自  
分のためだけに生きている人はいないという事実こそが教会のありさまだと感動するの  
です。

そして、その祈りはまた、ただ内向きにとどまっていらない。全世界のために…と向けら  
れていく。それが主の御心であり、また聖霊の感動を受けた私たちにゆだねられている  
祈りだわかります。

## ●本論

## I. 奇跡に映し出される信じる思い。

2:3 すると、人々がひとりの中風の者を四人の人に運ばせて、イエスのところに連れてきた。2:4 ところが、群衆のために近寄ることができないので、イエスのおられるあたりの屋根をはぎ、穴をあけて、中風の者を寝かせたまま、床をつりおろした。2:5 イエスは彼らの信仰を見て、中風の者に、「子よ、あなたの罪はゆるされた」と言われた。

この癒しの奇跡のもとにある一つのグループ。それは、信じる者たちのグループでした。

イエス様は、「その人たちの信仰を見た」とあるからです。

屋根を壊してでもイエス様の前に連れて行こう、とただ思うだけではなく、行動に起こした、そこに、イエス様がハッキリと「見た」という彼らの信仰がある。そして私たちもその信仰を「見る」ことができるのではないのでしょうか。

ある説教者はこの乱暴とも言えるこの行動についてこんな風に言っています。

「信仰は、人間的には、非常識だと思われるようなことでも恐れずに行わせる。『人をひたむきな生き方へと導いてくれる』のである。逆に、常識的で、論理的で、健全に見えることの中に、実はイエスに信頼を置いていない不信仰が潜んでいる場合もある。その結果、命と力を失うことにもなりかねないのである。日本のクリスチャンに力がないのは、案外このあたりに本当の原因があるのではないだろうか。」と。

## 「人をひたむきな生き方に導く信仰」

たしかに、非常識にも見えるこの4人の行動には、この中風の友人のためを思う強い思い、信仰があったということがわかります。それは「理屈」をはさまない、心からの愛による行動であったといってもいいかもしれません。

神さまの側から見た時どうでしょう。聖書を見る時わかる事があります。

神様はいつも<人の側の信仰のあり方を許される>と言えるでしょう。そしてさらに言うならば、神さまは<人の信仰をみたいと願っておられる>ことに気がつくのです。

あるときには、後ろから衣の裾に触れるということ、イエスさまに叫びながらついていくことなど聖書に記されています。神さまは、<人の側の信仰のあり方を許される><人の信仰をみたいと願っておられる>のです。

信仰がなくては、神に喜ばれることはできない。なぜなら、神に来る者は、神のいますことと、ご自分を求める者に報いて下さることとを、必ず信じるはずだからである。(ヘブル11:6)

教会は、そういう神さまを信じて祈り、歩む。そのような集いとして召されています。

- 1) 信仰の群として癒しを必要としている人、問題の解決を必要としている人々の執り成しの群となりましょう。
- 2) 執り成しのための心を合わせ、時に祈れない人、祈る事さえできない人のために代わりとなって執り成しましょう。
- 3) キリストを求め、その奇跡を信じて求めましょう。

「神さまを求めるひたむきな思い」で、共に主を求めて祈る者でありたいと心から願います。

## II. 奇跡に映し出されるイエス様の思い。

2:5 イエスは彼らの信仰を見て、中風の者に、「子よ、あなたの罪はゆるされた」と言われた。

### 1) もっとも大切されたのは罪の赦しです

病の癒しを願って連れてこられたこの中風の人を前にして、イエス様の最初の言葉は「子よ、あなたの罪は赦された」でした。

あれ？ちがうよ。ここは癒しが先でしょう！そう誰もが思う現場だったかもしれません。

ここで2つのことを皆さんと確認したいのです。

- ①イエスさまにとって、罪の赦しの宣言こそ、福音伝道の中心メッセージであった。
- ②イエスさまは、ご自分の心にかなう最善とされる形と順番で、物事を行われるということです。神さまが見て、私たちにとって最善なタイミングや順番、方法で答えてくださるということです。

### 2) それは権威による赦しと癒しであった

イエスさまは、律法学者たちの心の中で論じられた批判を霊的に感じ取り、ご自分が罪の赦しの権威を持つことを、その癒しをもってあらわされました。

2:8 イエスは、彼らが内心このように論じているのを、自分の心ですぐ見ぬいて、「なぜ、あなたがたは心の中でそんなことを論じているのか。2:9 中風の者に、あなたの罪はゆるされた、と言うのと、起きよ、床を取りあげて歩け、と言うのと、どちらがたやすいか。2:10 しかし、人の子は地上で罪をゆるす権威をもっていることが、あなたがたにわかるために」と彼らに言い、中風の者にむかって、2:11 「あなたに命じる。起きよ、床を取りあげて家に帰れ」と言われた。

このところでイエスさまが問うている問いに心を向けましょう。

それは、「もしこの中風の人が自分の目の前にいて、あなたはその人の病を治して立ち上がらせるのと、もしくはその人に『あなたの罪は赦された』と宣言するのはどちらがやさしいでしょうか？」と尋ねられているのです。

このことを考えることを通して、覚えたいのは、確かに言葉だけで罪の赦しを宣言するのであれば、こんなに楽なことはありません。その赦し自体は見えないのですから。見える病気を治す方が難しいと考える方もいらっしゃるでしょう。

しかし、本当に罪を赦すことは、病気の癒しという奇跡を行うよりも遙かに難しいことだと、聖書を通して罪の破壊力を知る私たちは覚えなければなりません。それは、究極的には、その人が天国に行けるかどうかを、左右することだからです。

ここで「人の子が地上で罪を赦す権威を持っている」とは、どういうことでしょうか？

イエスさまはそのすべての罪と病、そして裁きをご自身に引き受けられて十字架に進まれました。だからこそイエスさまは彼らを赦す権威をお持ちだったのです。

これがこの奇跡の中で現されたキリスト・イエスの思いです。

この癒しの奇跡を通して、キリストによる罪の赦しは、実態のない漠然とした言葉

だけのではなく、裏付けを持った確かなものであることが証されたのです。そのことがわかると、イエスさまのこの最初の言葉が、どれほどイエスさまの思いと力が働く素晴らしい宣言かがわかるではないでしょうか。「子よ、あなたの罪はゆるされた」と

### Ⅲ. 奇跡に映し出される人の思い

ここで、この奇跡を巡ってさらに2通りの対照的な人の反応を見ます。

それは、律法学者の人たちと一般の人々でした。

律法学者たちの反応や応答は、この後、聖書の中で繰り返し描かれていますが、それは、イエスさまの語ること、批判的となり挑戦的になり、ついに殺意に結びつくほど。

間違った特権意識やプライドがその目を曇らせる。イエスさまのなさることに愛があり、また神さまの恵みあってもそれにさえ批判的になってしまう…。一方で一般の群衆は、自分たちの力、想像や経験を遙かに超えた奇跡、御業を見て純粋に神様を賛美しました。それは素直な賛美であり、また神様に栄光を帰す、あるべき礼拝でした。

ただ素直に、そして心からイエスさまに近づき、求めていたのです。

それはあの中風の人を連れて来た4人の友人たちの姿にみることができ、またその癒しの御業を見て素直に神さまを見上げる人たちの姿からわかります。

2:12 すると彼は起きあがり、すぐに床を取りあげて、みんなの前を出て行ったので、一同は大いに驚き、神をあがめて、「こんな事は、まだ一度も見たことがない」と言った。

そこに神の愛がある。神さまの憐れみが働いている。そのことに素直に感動と感謝を表すこと、つまり礼拝の大切さを改めて思わされています。

このような礼拝が、いのちと希望の源流となります。

このコロナ禍においても、また次々と起こる様々な問題や悩みの中に置かれても、イエスさまを求め、イエスさまのもとに連れいて行く、このイエスさまにこそ解決があることを、改めて私たちは覚えたいのです。

イエスさまはそういう風に求めて近づく私たちの信仰を心から喜んでくださるからです。そのためにイエスさまはこの地上に来られ私たちのためにその十字架の死と復活をもって道を備えてくださったのです。

したがって、(キリストは)ご自分によって神に近づく人々を、完全に救うことがおできになります。キリストはいつも生きていて、彼らのために、とりなしをしておられるからです。(ヘブル7:25)